

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-03

鈴木晶教授最終講義 舞踊学への道：から だ、ことば、こころ

鈴木, 晶

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

異文化 / 異文化

(巻 / Volume)

19

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

22

(発行年 / Year)

2018-04-01

鈴木 晶 略歴

- 1952 東京都生まれ
- 1968 東京教育大学付属駒場高等学校卒業
- 1977 東京大学文学部露文学科卒業
- 1980 東京大学大学院人文科学研究科露文学専攻修士課程修了
- 1985 同博士課程単位取得満期修了
- 1987 駿河台大学専任助手
- 1988 駿河台大学専任講師
- 1989 法政大学第一教養部助教授
- 1993 法政大学第一教養部教授
- 2000 法政大学国際文化学部教授
- 2017 同退職
- 2017-2018 法政大学国際文化学部任期付教授
- 2018 法政大学名誉教授

履 歴 業 績

2018年2月5日 鈴木 晶

(1) 著書 (単著)

書 名		出版社	発行年
(1) グリム童話／メルヘンの深層	単著	講談社現代新書	1991
(2) フロイト以後	単著	講談社現代新書	1992
(3) 踊る世紀	単著	新書館	1994
(4) 図説フロイト／精神の考古学者	単著	河出書房新社	1998
(5) ニジンスキー／神の道化	単著	新書館	1998
(6) フロイトからユングへ	単著	NHK ライブラリー	1999
(7) バレエの魔力	単著	講談社現代新書	2000
(8) 『精神分析入門』を読む	単著	NHK ライブラリー	2000
(9) バレエ誕生	単著	新書館	2002
(10) バレエへの招待	単著	筑摩書房	2002
(11) フロイトの精神分析	単著	ナツメ社	2004
(12) バレリーナの肖像	単著	新書館	2008
(13) オペラ座の迷宮／パリ・オペラ座バレエの350年	単著	新書館	2013
(14) フロム／愛するということ	単著	NHK 出版	2014

(2) 著書 (編著・共著)

書 名	出版社	発行年
(1) 舞踊と身体表現	日本学術協力財団	2005
(2) 舞台芸術への招待	放送大学教育振興会	2011
(3) バレエとダンスの歴史／欧米劇場舞踊史	平凡社	2012
(4) 舞台芸術の魅力	放送大学教育振興会	2017

(3) 学術論文 (すべて単著)

論文タイトル	掲載誌	掲載年
(1) 機械と舞踊／ロシア・アヴァンギャルドと舞踊	ユリイカ (青土社)	1983年1月号
(2) 精神分析と文化記号論	RUSSISTIKA (東京大学文学部露文研究室年報) 第3号	1983年2月
(3) 思索するニジンスキー／「手記」とトルストイ主義	ユリイカ (青土社)	1983年11月号
(4) カーニヴァルとディコンストラクション／英米批評におけるバフチーン	現代思想 (青土社)	1985年8月号
(5) テニスをする牧神／ドビュッシーとニジンスキー	ユリイカ (青土社)	1986年4月号

論文タイトル	掲載誌	掲載年
(6) 愛と憎しみのアンビヴァレンツ／『ロミオとジュリエット』をめぐって	法政大学教養部紀要第57号	1986年4月
(7) 赤ずきん症候群／おとぎ話のイデオロギー	ユリイカ (青土社)	1986年7月号
(8) ヴォータンの復活／ユングと政治	現代思想 (青土社)	1986年8月号
(9) キャロルのロシア旅行	武蔵野女子大学紀要第22号	1987年2月
(10) ジョイスとユング	プシケー (日本ユングクラブ会報) 6号	1987年5月
(11) 個体発生は系統発生を繰り返す／精神分析と進化論	現代思想 (青土社)	1987年6月号
(12) 作者と主人公	季刊思潮 (思潮社) 第2号	1988年4月
(13) 性イメージのすれ違い	イマーゴ (青土社) 創刊号	1990年1月
(14) 搾取される子供たちの性	イマーゴ (青土社)	1990年2月号
(15) Problematique bakhtinienne	現代思想 (青土社)	1990年2月号
(16) 標準版フロイト全集をめぐって	イマーゴ (青土社)	1990年5月、8月号
(17) 海外文学／その愛の表現をめぐって	國文学 (學燈社)	1991年1月号
(18) 賢治・アンデルセン・キャロル	國文学 (學燈社)	1991年9月号
(19) バレエ・リュスと20世紀バレエの幕開け	別冊太陽 (平凡社)	1994年8月
(20) バレエとオペラのシンデレラ	劇場文化 (静岡県舞台芸術センター)	1997年10月
(21) ニジンスキー／男性ダンサー時代の幕開け	「ディアギレフのバレエ・リュス展」図録 (セゾン美術館)	1998年6月
(22) バレエの誕生／イタリア・ルネサンスから現代まで	シアター・オリンピック手帖 (静岡県舞台芸術センター)	1999年3月
(23) 踊るからだ／東と西	化粧文化 (ポーラ文化研究所) 44号	2004年6月
(24) コレオグラファーの系譜	新国立劇場公演プログラム	2010年6月～2011年4月
(25) L'ancêtre dont procèdent tous les dits	パリ・オペラ座プログラム	2010年6月
(26) オペラ座の怪人	ダンスマガジン (新書館)	2011年2月号、3月号、4月号
(27) 曲芸としてのバレエ	みすず (みすず書房) 627号	2014年6月号
(28) ハイキックとタップ	みすず (みすず書房) 632号	2014年11月号
(29) ファイエ『舞踊記譜法』(1700)をめぐって	早稲田大学演劇博物館図録	2015年12月

(4) 学会発表

題目	発表学会	発表年
(1) メルヘンにおける性の問題	日本児童文学学会大会 (愛知大学)	1991年10月11日
(2) ニジンスキーの「手記」について	日本ロシア文学学会 (北海道大学)	1995年11月10日

題 目	発表学会	発表年
(3) Nijinsky's Body : The De-systematization of Body and the Sexuality	国際文化人類学民俗学会（東京・砂防会館）	2002年9月20日
(4) 一般向けダンス・データベースの試み	人文科学とコンピュータ研究会（熊本大学）	2003年11月20日
(5) Folkdance in the Postmodern Society	国際舞踊史学会・国際舞踊学会合同大会（台北国立藝術大学）	2004年6月10日

(5) その他 翻訳書（単行本）（主なものに限る）

書 名	出版社	発行年
(1) マドレーヌ・シャプサル『嫉妬』	サンリオ	1978年
(2) ミシェル・ジュリ『不安定な時間』	サンリオ	1980年
(3) ラシルド『ヴィーナス氏』（高橋たか子と共訳）	人文書院	1980年
(4) シオドア・スタージョン『コスミック・レイプ』	サンリオ	1980年
(5) ロベール・アリエル『フロイト 精神分析の冒険』（岸田秀と共訳）	リプロポート	1981年
(6) エリザベート・バダンテール『プラス・ラブ（母性という神話）』	サンリオ	1981年
(7) ルネ・ジラルール『ドストエフスキー 二重性から単一性へ』	法政大学出版局	1983年
(8) リチャード・バックル『ディアギレフ／ロシア・バレエ団とその時代』	リプロポート	1983, 1984年
(9) ガレス・マッシュューズ『子どもは小さな哲学者』	思索社	1983年
(10) E・ベネット『ユングが本当に言ったこと』（入江良平と共訳）	思索社	1985年
(11) C・W・ニコル『小さな反逆者』	福音館書店	1985年
(12) コリン・ウィルソン『性と文化の革命家』	筑摩書房	1986年
(13) H・キュング『フロイトと神』	教文館	1987年
(14) ジョナサン・コット『子どもの本の8人』	晶文社	1988年
(15) ジャン・ガッテニョ『ルイス・キャロル』	法政大学出版局	1988年
(16) コリン・ウィルソン『性のアウトサイダー』	青土社	1989年
(17) ポール・クレシュ『アメリカン・ラブソディ／ガーシュインの生涯』	晶文社	1989年
(18) クラーク・ホルクイスト『ミハイル・バフチンの世界』（川端香男里と共訳）	せりか書房	1990年
(19) ジャック・・ザイプス『グリム兄弟』	筑摩書房	1991年
(20) ジョーン・スミス『男はみんな女が嫌い』	筑摩書房	1991年
(21) エーリヒ・フロム『愛するということ』	紀伊國屋書店	1991年
(22) C・W・ニコル『陸軍少佐夫人』	集英社	1993年
(23) ロロ・メイ『自分さがしの神話』	読売新聞社	1994年
(24) マリア・タタール『魔の眼に魅されて』	国書刊行会	1994年

書名	出版社	発行年
(25) アンソニー・ストー『フロイト』	講談社	1994年
(26) アンソニー・ステイーヴンス『ユング』	講談社	1995年
(27) ジョージ・ジョンソン『記憶のメカニズム』	河出書房新社	1995年
(28) スラヴォイ・ジジェク『斜めから見る』	青土社	1995年
(29) キュブラー・ロス『死ぬ瞬間と臨死体験』	読売新聞社	1997年
(30) ピーター・ゲイ『フロイト』	みすず書房	1997年
(31) キュブラー・ロス『死ぬ瞬間』	読売新聞社	1998年
(32) ワスラフ・ニジンスキー『ニジンスキーの手記 完全版』	新書館	1998年
(33) サラ・コフマン『女の謎』	せりか書房	2000年
(34) スラヴォイ・ジジェク『イデオロギーの崇高な対象』	河出書房新社	2000年
(35) スティーヴン・フィッシャー『ことばの歴史』	研究社	2001年
(36) スラヴォイ・ジジェク『汝の症候を楽しめ』	筑摩書房	2001年
(37) パウンテン、ロビンズ『クール・ルールズ』	研究社	2003年
(38) スティーヴン・フィッシャー『文字の歴史』	研究社	2005年
(39) ジョナサン・コット『奪われた記憶』	求龍堂	2007年
(40) スラヴォイ・ジジェク『ラカンはどう読め!』	紀伊國屋書店	2008年
(41) ダウエ・ドラーイスマ『なぜ年をとると時間の経つのが速くなるのか』	講談社	2009年
(42) クレイン、マックレル『オックスフォード バレエダンス事典』(監訳、共訳)	平凡社	2010年
(43) シェング・スハイエン『ディアギレフ 芸術に捧げた生涯』	みすず書房	2012年
(44) ロバート・スミス『ソクラテスと朝食を』	講談社	2012年
(45) アイヴァ・ゲスト『パリ・オペラ座バレエ』	平凡社	2014年
(46) ドラーイスマ『アルツハイマーはなぜアルツハイマーになったのか』	講談社	2014年
(47) スラヴォイ・ジジェク『事件!』	河出書房新社	2015年
(48) チャールズ・デュヒッグ『あなたの生産性をあげる8つのアイデア』	講談社	2017年
(49) レオ・ボルマンズ『世界の学者が語る愛』	西村書店	2017年

「舞踊学への道～からだ、ことば、こころ～」

- 司会者（輿石） 鈴木晶教授の最終講義を始めたいと思います。私は国際文化学部の教授会主任をしております輿石哲哉と申します。拙い司会になるかと思えますけれども、ご容赦ください。

最終講義に先立ちまして、鈴木晶教授のプロフィールをご紹介したいと思います。鈴木晶先生は1952年、東京品川区生まれ。東京教育大学附属駒場中高を経て、1971年に東京大学文科三類に入学、途中2度留年して1977年に東京大学文学部ロシア文学科を卒業。研究好きな先生はその後8年も大学院にて研究を続けられ（笑）、1985年、東京大学大学院人文科学研究科ロシア文学専攻博士課程を単位取得満期退学され、同年、法政大学第二教養部のフランス語の非常勤講師として初めて教壇に立たれました。

1987年に駿河台大学助手、88年には同専任講師に就任されました。担当は英語。普通、新設大学には4年間いなければならないのですが、柄谷行人先生、前川裕先生のご推薦で、89年、法政大学第一教養部に助教授として移籍されました。もとの大学では随分困って、訴訟を起こしてやるなどと言われたと伺っております。

その後、1993年に教授に昇格され、第一教養部時代には教授会主任を務められました。2000年から本学部、すなわち国際文化学部に移籍され、今日に至っております。法政大学には専任として28年、教授になってから24年、非常勤の時代を含めると32年の長きにわたり教鞭をとられてきました。

ご業績につきましては、1978年に最初の翻訳書を出版されて以来、40年にわたり、エーリッヒ・フロム『愛するということ』、キューブラー・ロス『死ぬ瞬間』、スラヴォイ・ジジェク『ラカンはどう読め!』、『ニジンスキーの手記』など、主要なものだけでも約80冊もの翻訳書を出されております。ことしも2冊、翻訳書を出版される予定だと伺っております。

学術論文は1983年から現在までに約30点、学会発表は国際学会を含めて5回と、精力的に活動されております。

1991年に最初の著書である『グリム童話』を出版、以後、『バレエ誕生』『ニジンスキー神の道化』『オペラ座の迷宮』等、共著、編著を含めて17冊、ご著書がございます。『ニジンスキー神の道化』にて1989年、日本ロシア文学会より木村彰一賞を受賞されています。

先生には非常に多方面での豊富な業績がございます。そのほんの一端のみ、ご紹介させていただきます。「良いワインに蔦の飾りは不要」【シェイクスピア『お気に召すまま』】と申しますので、さっそく最終講義をお願いしたいと思いますが、その前に国際文化学部学部長の榎木玲子先生より一言ご挨拶をいただきたいと思えます。榎木先生、よろしく申し上げます。

- 榎木 ご紹介にあずかりました国際文化学部の榎木玲子と申します。

ついにこの日がやってきてしまいました。昨年度末に、晶先生がおやめになりたいと

いうことを伝えに来てくださった日のことは今でも忘れられません。

その後、6月には先生のパートナーでいらっしゃる、それから、私自身もそのご著書を通して本当にお世話になりました灰島かり先生が多くの方々に惜しまれて亡くなりました。晶先生にとっては、本当に激動の1年だったかと思います。それでも先生はこの道を選ばれました。その選択について、私たちが口出しすることはできません。ですが、先生が国際文化学部、ひいては法政大学にとって、いかにかけがえのない研究者であり、教員でいらっしゃるか、それは本日のご講演が全てを物語っていると思います。

先日の教授会では、国際文化学部の名誉教授として先生を推薦することを承認いたしました。これ以上、この大事な時間をとってしまうことは控えたいと思います。

早速、晶先生にはご登壇いただきたいと思います。晶先生、どうぞよろしく願いいたします。

○**司会者** それでは、ただいまより鈴木晶教授の最終講義をお願いしたく存じます。

タイトルは、こちらにございますように「舞踊学への道～からだ、ことば、ころ～」でございます。それでは、よろしくお願いいたします。

○**鈴木** きょうは、せっかくの日曜日に貴重なお時間を割いていただきまして、皆様ありがとうございます。

最初に、いろいろお世話になった榎木学部長、そして教授会主任の輿石先生に御礼申し上げます。この最終講義の後に開かれる懇親会では、島田雅彦先生のご尽力をいただいております。島田先生にも御礼申し上げます。

これをいうと「何だ」といわれてしまいそうなのですがけれども、実はいろいろな事情があって、あと1年間は授業を続けることになっています。今年の3月31日で正式に退職いたしますが、任期付教授という形で1年間だけ授業をやることになりました。ですので、きょう授業を聞いて、おもしろそうだから聞いてみたいという方がいらっしゃったら、ぜひモグリでいらしてください（笑声）。

本題に入る前に、最終講義というものについて一言触れておきます。私はロシア文学科出身ですが、大学4年のとき、日本のロシア語学・ロシア文学の草分けの一人である木村彰一先生が退職されて、私はそのとき初めて最終講義というものを拝聴しました。木村先生は文学も語学もこなす大変幅の広い先生でしたが、そのご専門の1つが『イーゴリ軍記』です。『イーゴリ遠征譚』ともいいますが、オペラ『イーゴリ公』の原作でもある叙事詩で、ロシア最古の文学作品といわれます。木村先生の最終講義はその『イーゴリ軍記』に関する講義でした。かなり専門的な講義で、こちらはできの悪い学生だったので、内容の半分ぐらいしか理解できませんでした。『イーゴリ軍記』は「バヤーンのはひそみに倣って」という一句から始まります。バヤーンというのは語り部というか、吟遊詩人と呼ばれる人です。この冒頭の一句は、「ひそみに倣わず」とも解釈できるそうで、「ひそみに倣って」説と「ひそみに倣わず」説という2つの学説があったのです。木村先

生は最終講義になって、それまで自分が唱えていた説を覆したのです。どっちからどっちへ変えたのかは覚えていません（笑）。ほかの先生がたが仰天されていたのをよく覚えています。

せっかくの機会なので、私はラジカセをもって行って木村先生の講義を録音し、後でテープを起こしましたが、引っ越しを繰り返している間にどこかに行ってしまいました。その中に「筆誅を加える」という言葉が何度か出てきたのをよく覚えています。テープを起こしながら、この言葉の意味がわからないので、いろいろ調べたら、「筆で相手を懲らしめる」という意味であることがわかりました。この言葉はそのとき初めて知ったのです。妙に印象に残っています。

その後これまでに、私の師匠である岸田秀先生、宇波彰先生など、何人もの先生がたの最終講義を拝聴してきましたが、最終講義には3つのパターンがあるようです。ふだんの授業をやるパターン、ご自分の専門について講義するパターン、自分の研究者人生を振り返り、自分は今までこういうことをやってきた、というお話をするパターン、この3つです。

じつは鈴木晶を女性だと思っている人もおられるようです。また、バレエを研究している鈴木晶と精神分析を研究している鈴木晶は、同姓同名の別人だと思っている人も結構いるらしい。そこで今日は、どうしてそういうことになったのかという話をするつもりでした。ところが、最終講義の告知をした後、「大学ではどういう講義をやっているのか、それが知りたいので楽しみにしています」「大学の講義を一度拝聴したい」というメールをいくつか頂きました。最終「講義」という名前がついているからですね。それで、普段やっているような講義をしなくてはいけないのかなと考え始めました。初めて来た方に私の人生をいきなり語り初めるのもまずいかと思って、急遽、先週、計画を変更しました。

そういうわけで、今日は、前半に授業のさわりをご紹介し、後半に私の研究者人生についてお話ししたいと思います。

私がこの国際文化学部でどんな授業を担当しているかといいますと、「異文化と身体表現」「身体表象論」「映像文化論」「身体表現論」「表象文化演習」、そしてその他に英語の授業も担当しています。大学の授業には「何とか論」という題目をつけなくてはいけないので、いま申したような題目になっていますが、「身体表象論」と「身体表現論」はどう違うのだと言われても、私には答えられません（笑）。

まず演習、つまり俗にいうゼミについてご紹介します。私のゼミは1期生のころから映画研究をやってきました。最初は週一コマだったのですが、だんだん授業時間が長くなって、今では毎週3コマ続きでやっています。ただし私がやるのは最初の1コマだけで、あとの2コマはサブゼミ、つまり学生だけでやるのです。その時間は学生たちだけで映画を製作してきました。春学期は練習として、1分ぐらいのコマーシャルみたいな映像をいくつか作り、夏休みから秋にかけて、11月の末に開催される学部の学会に提出する、25分ぐらいの作品をつくるというのがだいたい毎年のスケジュールです。時間が

ないので、ここで学生の作った映像作品をお見せすることはできませんが、今年度の作品は You Tube にアップされていますので、ご興味のある方はぜひご覧になって下さい。「晶ゼミ」で検索すると出てくると思います。

さて今日は、演習はお見せするわけにはいかないのですが、いわゆる講義科目をご紹介しますと思います。どれにしようかなと迷った末、「身体表象論」のごく一部をご紹介しますことにしました。この講義では、世の中のさまざまなダンスについて話をします。たとえば学生たちにとって一番身近だと思われる YOSAKOI ソーラン。これのもとになったのは土佐のよさこい祭です。徳島県は阿波踊りのおかげで莫大な観光収入があるので、隣の高知県が、うちも何かつくって儲けたいと考え、人工的につくったお祭りです。それを今度は、後に国会議員になった長谷川岳という当時の北大の学生が札幌で始めたのが YOSAKOI ソーランです。ビデオを見ながら、そうした経緯を講義します。

よさこい踊りをつくったのは武政栄策という作曲家です。ペギー葉山の「南国土佐を後にして」というミリオンセラーを作った作曲家です。そういった背景を学びながら、そこでは一体どういうダンスが踊られているのかについて話をします。

また、タップダンスというと、フラメンコ、アイリッシュダンス、アフリカ系アメリカ人のタップと、主に3つあります。最近の学説では、貧しいアイランド人と黒人との交流があって、その中でアメリカのタップダンスができ上がり、それを白人が取り入れて、悪くいえば横取りして、1920年代のブロードウェイで定着し、その後フレッド・アステアとかジーン・ケリーとかが出てくる。そういうタップダンスの歴史を教えます。

また、格闘技とダンスとの境界線上にあるようなものがあります。たとえば太極拳は武術であると同時に体操でもあり、音楽に合わせて踊るダンスでもあります。ブラジルにはカポエイラという、ダンスだか格闘技だかわからないようなものもあります。

若い子に人気があるヒップホップは、日本ではダンスのことだと思われていますけれども、これは1974年にアフリカ・バンバータが命名した、新しい黒人文化のことで、ラップ、DJ、グラフィティ、そしてブレイクダンスからなる。そういう文化的な背景を解説しながら、ブレイクダンスのテクニク、その基本はアップダウンとダウンアップですが、そういうテクニクを解説していきます。

また、ボールルームダンスとか社交ダンスとか競技ダンスといわれるものがあります。最近では国際的にダンススポーツという名称に統一されているようではありますが、たぶんオリンピック種目になることを狙っているんでしょうねえ。このダンスのルーツはヨーロッパで、ルネサンス時代から延々とあるのですが、19世紀までは男女がほとんど接触しないで踊っていました。ワルツという男女が抱き合って踊るダンスができたらめっちゃくちや流行して、ヨーロッパで一世を風靡します。実は男女がペアになって踊るといのはヨーロッパ独特の特徴であって、ヨーロッパ以外のところではほとんどみられない。そういうことを教えます。

そうした中で、私が勝手に「バレエの姉妹」と名前をつけているスポーツ、これは新

体操とフィギュアスケートとシンクロナイズドスイミングですが、今日はそのさわりをお話したいと思います。

最初に新体操の話をしてします。新体操と呼んでいるのは日本だけで、英語には New Gymnastics という言葉はありません。Rhythmic Gymnastics、つまりリズム体操と国際的には呼ばれています。日本だけ新体操と呼んでいる。ちなみに器械体操と呼んでいるのも日本だけで、あれは Aesthetic Gymnastics、つまり美的体操と国際的には呼ばれています。

(エヴゲニヤ・カナエワの映像)

これはエヴゲニヤ・カナエワという、北京オリンピック（2008）とロンドン・オリンピック（2012）のゴールドメダリストです。この映像はエキシビションですので、衣装も競技の時とは違いますが、ご覧になればわかるように、完全にダンスです。カナエワの前、シドニー・オリンピックのゴールドメダリストはアリーナ・カバエワです。プーチンの愛人といわれている人ですね。新体操とバレエとの間には深い関係があって、豊かなバレエの伝統があったロシアとブルガリアで発達したもので、言ってしまうと体操とバレエが合体したようなものです。

新体操の話はそれだけにして、次にフィギュアスケートの話をしましょう。人類はどうやら新石器時代からスケートをやっていたようで、骨でつくったブレードが各地で発掘されていますが、そのへんのところは飛ばして、18世紀ぐらいに娯楽として非常に普及しました。18世紀というのは地球が小氷河期だったので、寒くて、テムズ川も凍っていた。この時代に、オランダとイギリスを中心にスケートが盛んになりました。ポールルームダンスもそうですけれども、何でもすぐ世界大会を始めるのがイギリスなのですが、19世紀にはスケートの世界大会などが始まっています。

フィギュアスケートのフィギュアはどういう意味か。日本は「フィギュア」というとスケートのことを指し、「フィギュア」というと人形みたいなものを指すわけですが、英語でも数字、人間の形、図形とかいろいろな意味があります。フィギュアスケートとは、図形を描くスケートという意味です。スケートリンクに8の字とか円とかを描きながら滑る競技だからです。

(ジャクソン・ヘインズの画像)

19世紀の中ごろに、今、映っているジャクソン・ヘインズというアメリカ人が、靴とブレードを鋳でとめたショートブーツを発明しました。それまでは靴の下にブレードを縛りつけていたのです。そしてブレードの先に、英語ではジャグといいますが、ギザギザをつけました。何でそんなことを考えたかという、この人はフィギュアスケートが8の字とかを描いて回るのはつまらないと考え、スピンというものを世界で初めてやった人です。この人がフィギュアスケートの生みの親といわれています。アメリカでは全然受けなくて、ヨーロッパにわたって大人気を博し、たしか最後、ロシアのほうで死んだのだと思います。この人は、実はバレエダンサーだったのです。つまり氷の上でバレ

エをやりたいというので始まったのがフィギュアスケートなのであり、フィギュアスケートとは「氷上のバレエ」に他ならないわけです。

(ソニア・ヘニーの画像)

この人はソニア・ヘニーです。年配のならご存じかもしれませんが、1920年代から30年代にかけて冬季オリンピック3連覇、世界選手権では10連覇という世界のスケートの女王でした。ノルウェーの人なのだけれども、珍しくすごく小さい人で、アメリカに渡りましてハリウッドの大女優になります。13本も主演映画があります。ハリウッドの大スターになったのです。

(ソニア・ヘニーの動画)

ご覧の通り、技術的には今のフィギュアと比べると随分素朴です。その後、体操と同じく、スケートの技術もめざましく進化して、現在に至ります。80年のサラエボから88年のカルガリーまで、カタリナ・ヴィットという選手が活躍しました。当時の東ドイツの人で、たいへんな美人でした。連続して金メダルをとって、引退後、アイスショーのようなものを始めました。一番当たったのは「カルメン」です。ほとんどバレエのようなスケートだった。この人が、前世代の最後の人で、その後出てきたのが伊藤みどりです。伊藤みどりによって、一気にフィギュアがスポーツ的というか、技術的なものになり、何回転できるかが勝負所になってしまったのです。そういう意味で、伊藤みどり以前以後で、フィギュアの世界は随分違っております。

(ビールマンのセミヌード画像)

変な写真をみせます。この人はタトゥーで有名なのですが、一体誰かわかりますか。頭越しに爪先をもってぐるぐる回るビールマン・スピンというのがありますが、あれを世界で最初にやったビールマンがこの人です。

(カタリナ・ヴィットのヘアヌード写真)

もっとすごい写真をみせます。最終講義でヘアヌードをみせる先生も余りいないと思いますが、これ、私はしばらく前にダウンロードして保存したんですが、今ネットで探しても多分出てこないと思います(笑声)。もとは、たしかアメリカの「プレイボーイ」誌か何かのグラビアだと思いますが、先ほど紹介したカタリナ・ヴィットです。日本だとスケーターはみんな選手と呼ぶわけです。浅田真央選手、というふうに。そのイメージと、こういうセクシーなイメージとの間は随分落差がある。そのことは日本国内だけで考えていると、ちょっとわからない。そういうイメージの問題についても話します。

時間がないので、次にシンクロナイズドスイミングに行きます。

(英文を提示)

これは、そこに書いてありますように、1984年のロサンゼルス・オリンピックの公式スポンサーだったマクドナルドのプレイスマットに書かれていた英文です。英語の先生でも知らない人がいるのではないかと思うのですけれども、プレイスマットというのは、マックを買うとトレイに乗ってきますよね。そのトレイの上に紙が1枚敷いてあります。

あの紙のことを英語ではプレスマットというのです。で、オリンピックの年に、こう書かれていたのだそうです。「The sport that took 40 years to travel from Hollywood to Los Angeles」、「このスポーツはハリウッドからロサンゼルスまで来るのに40年かかった」というのです。

このスポーツとは何か。それはシンクロナイズドスイミングです。この文章は、ある研究書から引用したのですが、その研究書は、一般の人がシンクロナイズドスイミングをいかに誤解しているかという例として、これを挙げているのです。

40年前にハリウッドで何があったのかといえば、それはエスター・ウィリアムズのことを指しています。代表作は『百万弗の人魚』。水泳の選手で、その後ハリウッドの大スターになった人です。この人がシンクロを始めたのだと思っている人が多いのです。

しかし事実はそうではありませんで、シンクロナイズドスイミングはもともと大学スポーツで、カナダとアメリカの大学で発達したものです。ところが一般にはエスター・ウィリアムズのイメージが強い。

『百万弗の人魚』は、実はある女性の伝記映画です。

(ケラーマンの画像)

その女性はこの人です。アネット・ケラーマン。オーストラリアで最も有名な女性です。何をしていた人かという、水中ショー、あるいは水泳ショーを始めた人で、ハリウッドでもサイレントの時代に6本か7本か映画に主演しています。

彼女は、フルヌードで映画に出た最初の女優の一人でもありました。それから、今のような水着を世界で初めて着た人です。それまで水着はスカートのように体型を隠すものでないといけなかったのです。体にぴったりした水着はこの人が世界で初めて着たのです。そのため、ボストンで警察に逮捕されたこともあります。

そのアネット・ケラーマンの伝記映画『百万弗の人魚』の監督はバズビー・パークリーです。この人は非常にユニークな人ですが、いまだに正当に評価されていない、アメリカの映画史では位置づけがまだ定まっていない人です。

(動画)

この映画は、1932年の『THE KID FROM SPAIN』という作品で、日本では『カンターの闘牛士』というタイトルで封切られました。

バズビー・パークリーは、パークリー・ショットという大変有名なショットをつくり出した人です。パークリー独特のショットはいくつかありますが、そのひとつはトップ・ショットです。スタジオの天井に穴をあけて真上から撮るのです。でもこの段階ではまだ真上からではなく、少し斜めから撮っていますね。女性たちはみんなハイヒールを履いています。

この映像は、私が調べた限り、シンクロナイズドスイミング的な水中バレエの映像化で最も早い例の1つだと思います。後のことですが、パークリーは『百万弗の人魚』によって、シンクロを広く一般に知らしめるのに大きな貢献をしました。

かつてニューヨークにヒッポドロームという巨大な劇場がありました。いわば東京ドームみたいな劇場です。ここでアネット・ケラーマンがショーをやり、同時に看板に名前を挙げていたのはバレエ史上最も有名なバレリーナ、アンナ・パヴロワです。この2人が共演していたのです。『百万弗の人魚』は You Tube でもみられますし、ビデオも売っていますので、ぜひご覧になってください。

以上、私はどのような授業をやっているかについて、一例をご紹介しました。

さてこれから、冒頭に予告したように、私は一体何をやってきたのかということについてお話しします。とうとう懺悔の時間がやってきました。どういうふうにお話ししたらいいかなと悩んでいたのですが、たまたまこの間テレビをみたら、「しくじり先生」というのをやっていまして、これだと思いました（場内爆笑）。有名人が出てきて、「私はこれで人生をしくじった」と告白する番組です。

きょう、生まれて初めて告白するのですが、私はとくに顔にはコンプレックスはないのですが（笑）、1つ大きなコンプレックスがあります。語学ができないというコンプレックスが昔からあるのです。でも今までどうしても告白できませんでした。翻訳家が「じつは自分は語学ができない」といったら仕事が来なくなるし、大学教授が「私は語学が苦手」といったら首になってしまう。だから、ひたすら隠していたのです。でも、もう大学も辞めてしまうので、今日のはっきり言ってしまいます。本当に語学ができないのです。念のため、申し上げておきますが、これは「私自身からみて」という意味です。これまで私は「名翻訳者」とか「語学の天才」と呼ばれてきました。実際、私から見ると、語学のできない人はまわりにたくさんいます。でも、自分で自分をみると、「こいつ、語学ができないなあ」と思うわけです。「こんな程度ではだめだ」と。

できないなりに、これまで多少は努力してきました。でも続かないんですよね。いろいろな外国語に入門するのですけれども、入門だけで終わってしまうのです。小学校3、4年ぐらいからNHKの「基礎英語」というラジオ講座を聴いていました。毎年聴くのですが、夏ぐらいまでしか続かないのです。毎年、最初のほうだけ聞くから、私は発音だけはすごくいいです。フランス語もそうです。発音だけ。いや、初等文法も得意なんです。そこから先が全然だめ。これまで、そのことをひたすら隠してきたのです。繰り返しますが、語学の才能は相当あるほうだと思いますが、それでも自分では「こんなじゃダメだ」と思ってきたのです。

さて、私はいろいろなことをやってきましたが、それを要約すると、きょうの副題に掲げたように「ことば、こころ、からだ」、この3つの語で自分の人生を要約することができるのではないかと思います。

まず「ことば」についてお話しします。私の育った家はとくに教育熱心というわけではありませんでしたが、たまたま父親がアングリカン・チャーチ（聖公会）の洗礼を受けていました。というのは私が小さい頃、父は2年間ほど脊椎カリエスで入院していたのですが、その頃、定期的に神父さんが病院に布教に来たそうで、それでキリスト教の

洗礼を受けていたのです。家の近くにあった聖公会の教会には、イギリス人のシスターがいて、そこに英語を習いに行ったりしていました。早くから英語には触れていたのです。

また、私の父親は若いころから、会社を立ち上げては潰す、というのを繰り返していました。倒産すると夜逃げするんです。家族で夜逃げするわけではなく、父親が1人だけ逃げてしまうのです。残された家族のところには借金とりが毎日来るわけです。それで、私の幼時体験のひとつは、借金とりが家に来るというものでした。で、会社が倒産して、父親は生活に困って何をやっていたかという、たまたま父は英語とフランス語とドイツ語ができたので、雲隠れしている間、翻訳をやって生活していたのです。で、お金ができるとまた会社を始めるわけです。何回会社を作って何回潰したか、覚えていませんが、そんなわけで、翻訳という仕事があるんだ、語学ができれば生活していけるんだ、ということ、小学校に上がる前から知っていました。

中学3年のとき、フランス語が勉強しなくなって、御茶ノ水にあるアテネフランセという学校に行ったら、入学資格は中学卒業以上と書いてあったのですが、事務の人に頼み込んだら、「まあ、中3でもいいですよ」と言われ、フランス語の勉強を始めました。

高校1年のときに第二外国語の授業でドイツ語を始めたのですが、これは半年間もしないうちに挫折してしまいました。どうもドイツ語は体質に合わないようで、その後、今に至るまでドイツ語はいわゆるカタコトです。

大学を受験するとき、入学してから語学を選ぶのではなくて、願書を出すときに第二外国語を選ばなくてははいけませんでした。その当時の東大の第二外国語はフランス語、ドイツ語、中国語、ロシア語の4つだったと思いますが、余り考えずにロシア語を選びました。たいていロシア語を選ぶ人は、ドストエフスキーを原書で読みたいとかいう志の高い人が多いのですが、私は志の低い人間だったので、そういう動機ではなく、フランス語とドイツ語はすでに齧っていたし、中国語については、当時はアジアにほとんど興味がなかったの、残るはロシア語しかない、そう考えたわけです。これもまた「しくじり」でありまして、さぼってばかりいたので、卒業するまでロシア語は全然できませんでした。

東大は駒場と本郷に別れていまして、1、2年は駒場にある教養学部に行き、3年になると本郷に行きます（ただし、駒場にある学部もあります）。3年生の4月にどこに進学するかを決めるのですが、その段階になっても、どこの学科に行こうか全然決めていませんでした。最初は美学をやりたいかったです。そのころは有名な今道友信先生がまだ現役で、私は今道先生に憧れていたの、美学科に進みたかったのですが、ラテン語とギリシャ語ができない人はだめといわれて、諦めました。ロシア語ができたならどこに行けるかといったら、ロシア文学科ぐらいしかない。それで、そのままロシア文学科にすすみ、卒業するまで6年いました。いまや「すみません」としかいえないのですが、じつは私は大学で授業に出たことがほとんどありません。世の中、因果応報というか、必ず罰が待っていて、自分が大学教師になったときに困りました。だって授業

を受けたことがないから、大学の授業がどういうものか知らないのです。ご存じのように、小中高は教員免許があるわけですがけれども、大学教授だけは免許がない、誰でもできるのです。車を無免許で運転しているのと全く同じで、何となく教えるようになってしまったのです。

卒業と同時に大学院にすすんだのですが、なんで大学院に進学したのか、ちょっと覚えていません。4年生になると、他の学部だとたくさん就職案内パンフレットが送られてきます。でも私は留年もしているし、文学部はあまり来ないのです。あ、1個だけ来ました。マクドナルドの店長でした（笑声）。

ある日、車を運転しながらFMを聞いていたら、FM東京のアナウンサーを募集していました。まったくの気まぐれで、願書を出しました。いやまったくの気まぐれというのは嘘ですね。じつは高校生のとき、ラジオに興味があって、TBSのディレクターに手紙を出し、スタジオ見学に行ったことがあります。そのとき、吉田日出子という女優に初めて会いました。

さてアナウンサーの試験に行ってみたら、一次に来た人がなんと800人。音声試験と筆記試験が交代で五次試験までありまして、なんと私は最後の4人に残ってしまいました。他の人たちはみんな放送研究会みたいところで訓練していて、すぐニュースも読めるような人たちでしたが、私は気まぐれで行ったから何の訓練も受けていない。どうもFM東京は、その年、東大卒をとりたかったらしいのです。社長面接まで行っただけですが、結局「きみはこの仕事には向かないね」と社長から言われ、不採用となりました。じつはこの年は1人も採用しなかったのです。実世界に出ることはそこでさっぱり諦めました。どうも自分は実社会には向いていないと思い、それで大学院に進んだのではないかと思います。

大学院での指導教授は川端香男里先生でした。川端康成の養女のお婿さんですがけれども、仏様のような教授でした。授業に1回も出ていないのに優（今でいえばA）をくれるのです。

大学院でも留年しまして、3年目の秋、指導教授に会いに行き、「私はどうも学問は向いていないと思うので、中退します」と宣言しました。そうしたら、「3年もいたのに、もったいない。今やめると経歴が学部卒になってしまう。どんなものでもいいから修論を出しなさい。修士号を出してあげるから」と説得され、修論を書くことにしました。でも、もう11月です。修論の締め切りは年末。1ヵ月家にこもって、なんとか修士論文を書きあげました。

卒論のときには、ロシアの象徴派詩人・作家のワレリー・ブリューソフの『炎の天使』という歴史小説を扱ったのですが、修論は、何しろ時間がないので、小説なんか読んでいる暇がない。詩だったら短いからいいと思って、同じブリューソフの初期の詩集をテーマに、修論をでっち上げました。で、修士論文を出して大学をやめるつもりだったのですが、じつは修士のときも奨学金をもらっていたのですが、博士課程に行くともっと奨

学金がもらえるというではありませんか。それで、金に目がくらみ、博士を受けることにしました。そうしたら、おまえの修論が成績一番だと言われ、おだてられ、そのまま博士課程に行って、大学院にさらに5年いました。

先生たちは、私がロシア語が全然できないというのをもちろんよくご存じでした。私もロシア語の教師になるつもりは最初からありませんでした。いろいろなきっかけで、私は若い頃から翻訳の仕事をやっている、公式には全部数えると翻訳書80冊ぐらいだと思います。違う名前でもやった翻訳も結構あるので、きっと100冊は超えていると思います。20代から1年に2冊か3冊を出していたという計算になります。よく働いたと思います。プロの翻訳家ならば、訳書が100冊ぐらいあるのはそんなに珍しくないと思いますけれども、大学教師をやりながら100冊というのは結構多いほうかなと思います。

翻訳をやっていたので、これで暮らしていけると考えていました。もともと会社づとめができるような人間ではないのですね。家で仕事ができるのが一番いいと思っていたのですが、世の中の三大悪の1つに結婚というのがあります(笑声)。いや結婚はまだいい。大変なのは子どもです。妻は昨年亡くなったのですけれども、結婚するまで資生堂の「花椿」の編集部にいました。フルタイムで働いていたのですが、子供ができると、そうもいなくなりました。私も、翻訳だけで妻子を養っていくのは難しいと判断し、やっとそこで就活を始めました。といっても、一般の就職をするつもりは全然ありませんでした。繰り返しますが、会社づとめはできないタイプなのです。だから大学の教師の仕事を探しました。休みが多いからです。ですが、ロシア文学科卒では就職できるところがない。

いろいろなツテをたどって、先ほどもご紹介にありましたように、まず法政大学のフランス語の非常勤講師になりました。しかし、フランス語を履修する学生が減っているため、将来、専任になるのはちょっと難しそうだったので、その辺は私も結構打算的な人間でして、英語だったら何とかなるかもしれないと、突然、英語の教師にくらがえしました。イギリス文学の富山太佳夫先生の紹介で、駿河台大学というところに、30代半ばで英語教師として就職しました。

今は予備校も潰れる時代ですけれども、当時の駿台は羽ぶりがよくて、大学創立記念パーティーにはコンパニオンというきれいなお姉さんが大勢来るのです。後で知ったのですが、駿台はコンパニオン派遣会社も経営していたのでした。覚えているのはそのぐらいです(笑声)。駿河台大学は埼玉県の飯能にあるので、通うのが大変で、泊まりがけで行っていました。

先ほどのご紹介にもありましたが、有名な柄谷行人先生と前川裕先生、このお2人が法政大学に誘って下さいました。もちろんその当時だって、コネで就職できるわけではありません。ちゃんと投票があり、教授会で審議されるのですけれども、とにかくそれで法政に移籍しました。

法政大学というのは実に居心地のいい大学です。大学教授が他大学に移籍することは珍しくありませんが、法政に来ると大体よそへ行かないです。私の中学1年からの同級

に金子勝という経済学者がいます。彼は法政から慶応に移りましたが、これは例外中の例外です。

最初は教養部の英語教師でしたが、一九九九年に国際文化学部という新しい学部ができて、そちらに移籍しました。だんだん専門の講義が増えて、英語はあまり教えなくなって、今日に至るわけです。

次に、「こころ」という言葉を挙げました。これは起源がはっきりしています。中学3年のときに保健体育の授業で、研究発表といいますが、文献を調べて発表するという課題がありました。一人一人の生徒にそれぞれ別の課題が与えられるのですが、私はたまたま「思春期の性」というテーマに当たって、それに関する心理学の本を何冊も読みました。そうしたら心理学にはまってしまいました。心理学を学ぶと、周りにいる同級生たちが、ある日突然子供にみえるんです。私はみんなの心がわかる（笑声）。

心理学というのはすばらしいものだと思って、だんだん深みにはまっていったのですが、正式に大学で勉強したことはありません。学生時代、偶然に、もうだいぶ前にお亡くなりになりましたけれども、秋山さと子という先生の知己を得ました。スイスのチューリヒにあるユング・インスティテュートにいらした方です。日本では、たしか文化学院を卒業し、その後、年をとってから駒澤大学を卒業されました。早稲田の近くにある禅寺の娘さんで、お寺の境内に住んでおられたのですが、たまたま私をそこに連れていってくれる知人がいて、先生を紹介してくれたのです。この秋山先生というのがまた変わった人で、初対面なのに、「今、翻訳を頼まれているから、手伝ってくれ」と、ほんと本を渡されて、いきなり翻訳をやることになったのです。私のことはほとんどご存じないのに、です。それ以来、秋山先生の翻訳を何冊も代理でやりました。

それでユング心理学を勉強するようになっていったのですが、1年ぐらいたって、今度は別の友達が岸田秀先生を紹介してくれる機会があって、岸田先生の家に入出入りすることになりました。こちらはフロイトの精神分析学です。

そういう意味で、まったくの独学なのですが、たまたま秋山先生と岸田先生に個人的に教えを請うことができ、いつの間にかそっちの本を書く機会を与えられ、ずるずると心理学の仕事も続けてきました。

私が最初に出した著書は『グリム童話』という本です。ドイツ語が全然できないのに『グリム童話』という本を出すんですから、心臓に毛が生えているといわれてもしょうがないですね。これには、あるいきさつがありまして、かつて講談社現代新書の編集長が秋山先生のところに入出入りしていて、私は彼から、フロイトから現代までの精神分析思想の流れに関して新書を1冊書いてほしいと頼まれたのです。私も安請け合いして、「では書きます」と答えたのですが、それこそフロムからライヒからラカンからドゥルーズまでやらなくてはいけないので、そんな簡単には書けない。今くらい年をとってくると結構はったりがきくので、書いてしまったりするのもかもしれませんが、そのころはまだ若くて、ちゃんと書かなくてはいけないと思ったので、引き受けはしたものの、全然本

気ではなかったのです。

この編集長は数年前に急死されました。まだ60代でした。鷺尾さんという有名な編集者です。講談社の名編集長、というより名物編集長で、毎月はがきが来るのです。「進んでいますか」と一言だけ書かれているんです。鷺尾さんの筆跡、生涯忘れないです。そういうはがきを毎月もらうのですけれども、こっちはポイとごみ箱に捨ててしまう。何年か経ってから呼び出されて、「てめえふざけるな、この若造が！　こちらが頭を下げているのに書かないとは何事であるか」と、ものすごく怒られました。私も負けずに、「このテーマは難しいので、そう簡単には書けません。でも実は新書向けのいいテーマがあるから、それで書かせてくれませんか」と言ったら、「いいよ、そのかわり一ヶ月で書け」というのです。もう発売日が決まっていたのです。実は、その月に出す予定だった著者の原稿が上がってこないで1冊穴があいてしまう、そこを埋めろというわけです。それで一ヶ月家に籠もって書いたのが講談社現代新書の『グリム童話』です。

そうしたら、何とベストセラーになり、日本にグリム・ブームが起きてしまいました。この私が仕掛け人だったのです。ついには『本当は恐ろしいグリム童話』という有名な本まで出て、大ブームになってしまいました。何でグリム童話の本を書いたかという、ちょうど当時、グリムの生誕200年で、海外でたくさん新しい研究書が出たのです。私はそれを全部読んでいたので、一ヶ月でそれをうまくまとめて書いたわけです。10万部以上売れましたが、印税は全部飲んでしまいました（場内爆笑）。

でも、じつはこれは罠だったのです。グリム童話の本を書いたから、フロイトから現代までの話はチャラになったのかと思ったら、鷺尾さんは「そっちも書け」と言うのです。「おまえはいつまでも書かないから、講談社に『本』というPR誌があるから、そこで連載しろ」と。毎月書いていくと1年でちょうど1冊になるのです。ところが第一回目の締切は『グリム童話』と同じく1ヵ月後です。でもとにかく連載を始めました。それが2冊目の著書『フロイト以後』で、これも8万部ぐらい売れたでしょうか。バブルの時代は本の発行部数や本の売れ行きもバブルだったのです。でもバブルで儲けた金は泡のように消えていくわけです。全部飲んでしまいました。

精神分析関係の仕事をしているうちに、私はもちろん臨床をやっているわけではないので、患者さんをみたり、カウンセリングをやったりすることは一切ないのですけれども、誤解していろいろ相談に来る人がだんだん増えてきました。これはやばいと思って、早く看板をおろさないといけない、いろいろな人が相談に来て、刃物で刺されたりしても嫌だと思って、やめました。

それと、心理学の中でも精神分析というのは、深層心理学といわれるように非常に深いところのことを探求しなければいけないので、重くて、疲れてしまったということもあります。40ぐらいになったとき、あとは余生だ、楽しいことをやろうと思って、深層心理学からバレエに転向しました。

しかし、もちろんいきなりバレエの研究者になれるはずありません。じつはこの転

向には伏線があります。ここで3つ目の言葉、「からだ」の話に入っていくのですが、これも原点ははっきりしています。

(母の写真)

この人は誰かという、私の母です。最終講義で自分の母親の写真のみせる人も余りいないと思いますけれども、これは50代のころ、資生堂のヘアカラーのモデルをやったときの写真です。もともと日本舞踊のお師匠さんだったので、私が物心ついたときから家の中では長唄とか常磐津とか清元というものが年じゅう聞かれました。私は踊りとともに育ったわけです。

先ほど触れましたように、私が幼いころに父親が2年間も入院していたので、生活に困って、母親が生活のために盛んに踊りを教えていました。当時はお金持ちの家に出稽古に行っていました。今でも出稽古というものはあると思いますが、家庭教師みたいなものです。先生が行って個人教授する。自宅にもお弟子さんたちが通ってきていましたから、私は踊りの世界で育ったといっても過言ではありません。

でも、日本舞踊は全然やりませんでした。母は私にも教えようとしたのですが、恥ずかしくて激しく抵抗しました。よく覚えているのは、小さいころ、新年会とか、おさらい会とか、簡単なものは家でやるので、舞台ではなかったですけども、1部屋、ヒノキを張って板張りになっていまして、そこに若い女の子たちがいっぱい来て、着物に着がえてお化粧するわけです。おしろいの匂いがぶんぶんしました。性の目覚めというわけではないのですが、なんとなく色っぽい、いい匂いだなと思っていました。

さて、都民劇場という団体があります。会員制で、毎月いろいろな劇場芸術を見に行くという団体です。中学1年のとき、私のクラスメイトの杉山太郎がこの都民劇場を教えてくださいました。私の中学一年のクラスは、さっき触れた経済学の金子勝とか、映画学の四方田犬彦とか、変なのがいっぱい集まっていました。中国演劇の杉山太郎は早く亡くなって、もう10年以上経ちます。中国演劇というと、みんな京劇かと思うのですがけれども、彼は中国の現代演劇の研究をやっていました。明星大学の教授でした。すごく早熟で、その彼が都民劇場というのを教えてくれて、私も入会しました。それで最初に見に行ったのが牧阿佐美バレエ団の『白鳥の湖』だったのです。

私は、踊りといったら着物を着た日本舞踊しか知りませんでした。都民劇場というのは公平に、月によっていい席だったり悪い席だったりするのですが、『白鳥の湖』のときはすごくいい席でした。前から3列目ぐらいで、若い女性たちの脚が目の前に見える。「こっちだ、こっちのほうがいいや」と思いました(笑)。中学一年のときです。

それですぐにバレエ・ファンになったかという、ここが私のひねくれたところで、そっちへ行くまでに20年ぐらいかかるのです。つねに潜伏期というのがあるのです。で、20年近く経ったとき、結婚した相手が大のバレエ・ファンでした。彼女はルドルフ・ヌレエフの大ファンだったのですけれども、私は結婚して初めて、彼女に引っ張られて頻繁にバレエを見に行くようになったのです。だから、私のバレエ歴はとても短くて、見始

めたのが20代後半ですから、それ以前のことは余りよく知らないのです。

でも、バレエを観ているうちに、だんたん、日本舞踊と西洋のダンスとの間にも共通する何かがある、と考えるようになり、そもそもダンスというのは何なのかと、あれこれ考えるようになりました。今日うちの娘も来ているのですが、この娘がやっと歩き出すようになったところに、音楽をかけると、喜んでぐるぐる回るので。目が回ってぶっ倒れるまで回っている。倒れても、楽しそうにげらげら笑っている。「そうか、ダンスは回ることから始まるのだ」という啓示を娘が与えてくれたのです。あらためて「回る」ことに注目してみると、ひたすら回る舞踊はたくさんある。イスラム教にもセマーというぐるぐる回るダンスがあります。自分が回るということは、反対からみれば世界が回ることでもあります。

同時に、人間は基本的に役に立つことしかしない動物なわけで、どこかに移動しなくてはいけないから歩くわけですが、その意味ではダンスは役に立たない。歩けばどこかに行けるわけですが、回っていても、どこにも行けない。同じ場所にずっといる。これがダンスの原点なのだとこのことを発見しました。そんなことを考えるようになると、凝り性なので、やり始めるとすごくやるのです。「すごくやる」というのは、大学教授にしてはあまりに語彙が貧困ですね（笑声）。何をやるかという、文献を読むのです。

そうしたら、日本には舞踊学というのはほとんどないということを知りました。多くの女子校では体育でダンスを教えるので、お茶の水女子大学とか日本女子体育大学とかには実技のコースがありますが、文献的な研究はほとんどありません。これは独学するしかないと思って、独学で勉強を始めました。法政大学に就職して、最初の在外研究（サバティカル）のときに、イギリスに1年半滞在することができました。大学のお金で行っているのだから半分は大学のために勉強をしなくてはいけないと思って（そのころは私も真面目でしたから）、半分はロンドン大学の音声学部というところに行きました。音声学というものは、私にとっては余りおもしろい学問ではないのですが、今では、音声入力などの技術との関わりで、非常に重要な学問になっています。

ロンドン大学は2つありますけれども、私はユニバーシティ・カレッジのほうの音声学部に所属していました。ここには昔、ダニエル・ジョーンズという大変有名な教授がいました。『マイ・フェア・レディ』のヒギンズ教授のモデルになった人です。

で、半分はそこに所属して勉強し、残りの半分は自分の研究のために使わせてもらおうと思って、サリー大学の舞踊学科に行きました。そこにはジャネット・ランズデールという教授がいました。イギリスでも舞踊学はそんなに古いものではなく、この人が草分けなのです。

それ以来、バレエが中心ですけれども、本格的にダンスの勉強をするようになりました。私の専門は舞踊の歴史なので、実際にバレエを観ることももちろんありますが、むしろ本を読んで、今ではもう観ることができないバレエを研究するようになりました。

その後どうなったかという、一通りバレエの歴史に関する本も書いたので、じつは

最近、バレエにちょっと飽きてきて、数年前からミュージカルのほうに関心がシフトしてきました。とくにアメリカの30年代のミュージカル映画です。舞台のミュージカルは、今では観られません、映画ならば観られます。幸運なことに、21世紀に入ってから、古い映画が次々にDVDでみられるようになりました。昔だったらアメリカのフィルムセンターに行ってみなければいけなかったのが、今では日本でも簡単に手に入るようになって、それで研究できるようになったのです。

私はミュージカルといえばタップだと思っていたわけですがけれども、30年代の映画をみると実は半分バレエだったということが非常によくわかります。バレエとタップが共存していたのです。両方入れなくてはいけないというハリウッドのある種のポリシーがあったのです。とはいっても、かなりインチキなバレエで、促成栽培ではないけれども、促成学校があって、そこに何週間か行って、舞台や映画に出演するのです。バレエはそう簡単にできるものではないので、みんなうまくはないのです。

本格的なバレエが初めて登場するのはシド・チャリース以後です。バレエ・ド・モンテカルロにいた大変な美人で、ハリウッド随一の脚線美といわれた人ですがけれども、踊りも非常にうまい。『絹の靴下』という有名な映画がありますけれども、絹の靴下を履く場面はぜひみていただきたいと思います。駅などで500円とかで売っていると思いますけれども、涙が出るほど美しいです。

というので、私は定年よりも1年前倒しでやめることになりましたけれども、先ほどいったように1年間、授業だけはやります。早稲田の大学院と藝大でも授業をもっていますので、バレエの歴史を研究したかったら、先ほど申し上げたように、モグリで来ていただければと思います。あと1年くらい経てばだいぶ暇になり、もう少し本が書けるかなと思っています。

でも、妻を亡くした男の寿命は大体5年ともいわれますので、私もあと5年かなと思っています。最終講義で縁起でもないですね。

先ほど申し上げたように、法政大学には本当に長いことお世話になりました。現在の総長の田中優子さんは私と同年で、昔から知り合いですけれども、学校の総長として大変いい仕事をされています。最終講義にこんなことを言うのも変ですが、法政大学のますますの繁栄を祈願して私の講義を終わりたいと思います。どうもありがとうございました（拍手）。

○司会者 鈴木晶先生、どうもありがとうございました。

この後、懇親会が4時からございます。その前にまだ時間があります。ちょうど九段の上海庭というところで、今、案内を出していただきます。

○鈴木 受付のところに紙があったと思うのです。試験用紙と書いてある（笑声）。これから試験をやります。というのほうで、一言、去りゆく者にメッセージがいただけたら大変光栄です。

- 司会者 ゼミ生から花束の贈呈があります。
- 真家瑠美子（ゼミ一期生） ゼミ生からのお花とさせていただきます。私で済みません。
お疲れさまでした。ありがとうございました。
（花束贈呈）
- 鈴木 彼女は真家瑠美子とって、劇団四季で主役を張っていた子です。
- 司会者 それでは、これもちまして鈴木晶先生の最終講義を終了させていただきます。
もう一回、盛大な拍手をお願いします。
（満場拍手）

——了